

## 亡国の危機に 『諸君!』の休刊を憂う



わたなべ としお  
渡辺利夫  
(拓殖大学学長)

どうしてこうまでなってしまったのかと問われても、にわかには答えられないが、冷戦終焉後の日本の現在ほど国際社会の中を、行方定まらず漂流をつづけた時代はかつてなかったのではないか。

“行方定まらず”といったが、行方を追究しようという構え自体が指導者や国民の中から消えてなくなってしまうのかも知れない。恐怖にも似たそういう感覚が私にはある。

長距離弾道ミサイル・テポドンの一段目のブースターが秋田県西方沖に落下し、二段目が秋田・岩手両県の上空を越え太平洋の彼方で沈んだという事態に直面させられながらも、我が国にはとりたてての直接的被害はなく、配備されたイージス艦や地对空誘導弾・パトリオット(PAC3)からミサイルを発射することともなく、事態が無事に収まったことに指導者は安堵の胸を撫で下ろしているらしい。国民の方はといえば、折からの花見の方が大事であったかに見える。近時の日本は万事が「その日暮らし」なのである。

国連による新たな制裁決議に持ち込もうというのが外務省による努力のせいぜいのところだが、こんなものが何の役にも立たない代物であることは、もう完全に実証済みである。制裁決議を出せば六カ国協議において北朝鮮の態度を硬化させる効果しかないという中露の主張に毅然たる反論もできず、おぎなりの議長声明で落着くという次第である。北朝鮮の完全なる勝利である。

そもそも六カ国協議などという「同床

異夢」の船に日本が乗っかって北朝鮮に何かの対応をしているかのように振る舞うこと自体が、欺瞞なのである。現在の六カ国協議が米朝協議を迫認するだけの、日本の国益にとってはまるで効用がなく、いな、日本の国益を毀損する場になり下がっていることを、日本の外務官僚が知らぬはずもない。

開国・維新を経て日清・日露戦役にいたる時代と現在とは、時代環境が違うことは百も承知だが、日本を取り巻く地政学的状況が緊迫に充ち満ちているという事実において、両者はまぎれもなく通底している。にもかかわらず、彼の時代と現在とは、指導者の危機管理能力に雲泥の差がある。

ミサイルはもとより、これに搭載する原子爆弾ぐらいであれば、北朝鮮のような貧乏国でも十分製造可能なほどに「技術標準化」が進んでいる一方、海外での軍事力行使にみずからの手を固く縛っている日本の現況からすれば、勝敗はもう目にみえている。実戦可能な核戦力を北朝鮮が保有してしまえば、北朝鮮主導の

半島統一も実現可能なシナリオの一つとなつてこよう。日本はこの事態に拱手傍観して亡国をよしとするつもりか。事態に対する指導者の想像力欠如は、恐ろしいばかりである。

私が『諸君！』に執筆の機会を与えられ書き連ねたことをいま振り返れば、現在の指導者が依って立っているのであるう、安穩なるポストモダンズムへの批判ばかりであったように思う。『諸君！』の休刊は惜しんでも惜しみ切れない。日

本の言論界は多様な形を取りながらも左翼史観や東京裁判史観からの脱却、保守主義への回帰が着実に進んでいる。保守主義への回帰を確たるものとするには、多様な保守主義の言説を包容しながら凝集する媒体が不可欠である。大出版社とて霞を食って生きていけるわけではないのだから、休刊も致し方ないのであるが、いずれ『諸君！』の精神を引き継ぐ言論誌がいつかから出現することを祈るばかりである。